
AJ ワークショップ

世界の中の難民とわたし —日本に來ている難民を通して考える—

日時：2013年7月11日（木）

場所：町田キャンパス 30号館 301教室

講師：石川えり（認定NPO 法人難民支援協会事務局長）

コーディネーター：土佐昌樹（21世紀アジア学部）

本日は、日本のなかでの難民支援という、遠いようでいながら、実は私たちにつながっている難民問題について話をさせていただければと思っています。

日本が難民を受け入れ始めたのは、インドシナ難民やラオスやカンボジアの政変によって人が逃れてきた1975年からです。その後難民条約に加盟し、制度として整え始めました。日本に逃れてきた難民は、政府に申請を出し、それが認められて正式な難民となります。従って、申請を出す前の難民や申請中の難民という人たちもいます。私たちの団体に来る1日70件ほどの問い合わせのうち、9割が難民申請中の方です。申請が認められれば条約難民。認められなくても、何らかの事情で祖国に帰ることができない人たちに対する人道配慮に基づく在留許可というものもありまして、私たちはそういう人たちを準難民と呼んでいます。保護を受けることができます。そのほかに日本政府が2010年から新たに始めた取り組みで、第三国定住というものがあります。これは、日本に直接逃れてきた人ではなく海外のキャンプにいる人を受け入れるというものです。また、難民二世や故郷にいる家族を呼び寄せた、というケースもあります。

日本に難民がどのくらいいるかといいますと、制度が始まってから徐々に増えてきて、2012年は過去最高の2,545人が難民申請をしました。けれども認定されたのは18人、準難民は100人ほどで、とても少ないのです。昨年は50か国ほどの人が申請をしました。最多はトルコ国籍でしたが、全体を見るとアジア及びアフリカの国々の方が多い傾向があります。認定されたのは8割以上がミャンマーの人で、非常に片寄っています。その傾向はここ10年同じです。

日本以外の難民受け入れの状況を見ますと、先進国のなかで受け入れ数が多いのがアメリカで、25,000人。そのほか10,000人から数千人ほどの規模で、カナダやドイツ、フランスなどで受け入れられています。日本はたったの18人。他の国と比較しても非常に低いということがわかるかと思えます。

日本で難民になるには、法務省に申請書を提出してそれが認められる必要がありますが、一次での申請では不認定の場合が圧倒的に多く、ほとんどが異議申し立てか裁判で認められるケースです。

また認定までにはだいたい数年かかります。それほど厳しくても日本に来るのは、逃げる先が選べないからです。日本のビザが最初に出たから、あるいは家族や親せきがいるから日本に来た。他に、日本は「平和」だというイメージがあるから、という人もいました。

日本での暮らしというのは彼らにとってとても厳しいものです。まず言葉が難しい。母語どころか英語もよく通じない。保険に入っていないければ費用が高くて病院には行けません。就労に制限があったり、生活支援などももらえず、困窮している方が多いです。私たちの事務所はそれほど広くはないのですが、他に行き場はないし、冬は暖を取れる場所がないからと、毎日難民の方がいらっしやいます。閉室時には外を歩いたり駅で寝たりしているそうです。一食くらは事務局で出せるようにしていて、といっても大したものとは提供できず、カップヌードルとかサバ缶などを渡しています。

難民支援協会は、実際の支援活動、そこから出てきた課題を考える政策提言、より多くの方に難民を知ってもらう広報活動の三つの柱でやっております。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の事業実施契約パートナーとして一人ひとりに直接支援するのが事業の一番大きな柱ですが、そのなかにも申請手続きのサポートなど法的支援と医療の相談など生活支援のふたつがありまして、そのほか難民認定後の方々のために就労支援や日本語教育もしています。また、政府に対する申し入れ、取材などのメディアへの広報、難民アシスタント養成講座などを設けております。

私たち難民支援協会は、日本にいる難民が、食べたり、寝たり、働いたりといった当たり前の生活を送れるように支援する団体だと考えています。残念ながら、当たり前が当たり前でできないのが日本の状況です。彼らが家や食べ物が手に入る当たり前の生活を送るためには制度改革が必要で、最低限の支援をし続ける体制というのが必要で、事務局長として私は、個々の相談にのるというより、恒常的な支援体制をつくっていく、あるいはもっとその体制が確固としたものとなるように政府提言をするということをやっています。

民間の支援の輪は様々なかたちで広がっているのですが、そのひとつに料理があります。このほど、難民の人から教えてもらったレシピをまとめて『海を渡った故郷の味』という本をつくりました。レシピだけでなく、難民の方々の状況などを含めて紹介しています。非常に好評でして、そこから大学の学食や生協でメニューとして取り上げていただいたりしています。

本の制作で苦労したのは、難民の人たちは私たちのように「国」に所属しているという感覚がなかったり、民族にこだわりを持っている人がたくさんいるところです。出身地の地図を作るのはとても大変でした。たとえば「アゼリ人」はアゼルバイジャンに多く住んでいる民族なのですが、国境というのはあとから引いた線であり、アゼリ人が全員アゼルバイジャンにいるわけではありません。この本にレシピをくださった方もアゼルバイジャンの人ではありません。したがって、アゼルバイジャンの料理です、といっても正しくないのです。こういったことから見えてくる世界の現状、国や国境というのが何であるのかということは、私も難民支援に携わる者の意識として持っていきたいと思っています。

難民を取り巻く状況には多様な関係者がいます。例えばこのように大学でお話させていただく機会もそうですし、専門家や有識者が難民政策に対して発信したり貢献したり、ということもあります。メディアに取り上げてもらうことも重要です。我々 NGO は難民に近い立場で支援ができると考えていますが、そこに真摯にかかわることによって、難民の人たちが活躍できる場というのも増え

ていってくれればと思っています。

難民の方がおっしゃった言葉の中で忘れられないものをひとつ紹介させてください。「私たちは種だと思う」。種がコンクリートの上に落ちてしまったら芽吹くことはできないけれど、土の上に落ちることができたら根を張って花を咲かせることができる。その「種」という存在の難民を、コンクリートの上で干からびさせてしまうのか、もしくは多様な、花をつけたり実をつけたりすることができるのか。それは一人ひとりが構成する「土」としての社会に係ってきます。私たち支援する側はその土壌を変えていこうという思いで活動に携わり、難民支援の可能性を能動的に引き出していきたいと思っています。

みなさん今日はどうもありがとうございました。どうぞHPや事務所にいらしてください。フェイスブックなどでも情報を発信しています。